

素晴らしい須走を知りたい!

「すばらしい隊」養成講座 ヘリテージ講演会講座概要

世界遺産富士山の守り方、活かし方

■日時

令和3年2月23日(祝・火)9時~12時

■場所

須走コミュニティセンター

■講師

○西村 幸夫 國學院大學教授

■講義概要

1. 世界遺産登録のプロセス

- 登録になるためには、国内の暫定リストに載らなければならない。富士山は2006年に載った。富士山と同じ時に載ったのは、富岡製糸場、長崎の教会群、飛鳥藤原。まだ飛鳥藤原が登録されていないので、現在議論中。
- 日本は世界遺産条約を批准しているのが1992年だったので、92年の段階で暫定リストを提出している。そこから準備が整ったものから世界遺産に推薦する。
- 推薦書がユネスコに2月1日までに毎年提出する。
- 文化遺産と自然遺産に分かれて、文化遺産はイコモスが審査する。
- ユネスコ登録に値するか審査をして、それを勧告して6月から7月に世界各地で行われている世界遺産委員会で決議をされ、登録する。

2. 武力紛争時の文化財保護

- そもそも世界遺産はどういう事から始まったのか?長い前史があり、武力紛争時に文化財を守る必要があるということを議論してきた。戦争の時に、全く関係ない文化財が破壊されてしまう、逆にそういうものを狙って攻撃をして敵国の誇りの象徴であるような文化財を壊すことで意気消沈させたりする。文化財が壊れてしまうことが起きたのでそれを避けるのが出発点。
- ハーグ条約ができ、武力紛争時にこのエンブレムの書いた旗をその文化財に立てると、そこには軍隊を駐留させないし、敵国もそこをターゲットにしないという条約ができた。武力紛争が起きてもそこに影響を及ぼされないという仕組みができた。それは文化財が人類共通の宝であり、戦争とは無関係なので、当事国それぞれが守るべきだという発想からであった。現在のハーグ条約は1954年に採択され、日本も遅かったが批准している。
- イギリスの教会(写真)。戦争で壊れてしまう。こういうものから守ろうということ。これは武力紛争時に限ったもの。

3. 世界遺産の発想の登場

- そうじゃない発想。世界遺産に繋がる発想が生まれる。1960年、エジプトのヌビア地方(ナイル川の上流域)をユネスコが始める。なぜかという、スエズ運河の問題が絡む。
- そういう保存キャンペーンがあり、文化財を守らなければならないという世界的な動きが起こる。同じ頃、自然遺産に関しても国際的な評価をしようという動きがアメリカを中心に起こる。世界で最初に国立公園を作ったのはアメリカ。立派なイエローストーンのような国立公園を世界的な遺産にしたい



という動きが起こる。

- －文化遺産と世界遺産は全然違う動きの中で色々なキャンペーンが行われていくが、両方が合体して72年に統合が模索された。

4. ヌビア遺跡の救済

- －なぜヌビア地方が問題かという、スエズ運河はフランスやイギリスが造ったが、エジプトがスエズ運河の国有化をしてしまうということが原因で中東戦争が起こる。フランスやイギリスはエジプトと戦っていた。
- －ところが、そこで起きて来たのがアスワンハイダムというダムの工事の計画。このダムの工事で、1970年に竣工するが、水がたまり始める。たまり始め、そのまま計画通りに行くと神殿が水没してしまう。写真は、アスワンハイダムが完成してダム湖の水位があがっているところ。それは大変だということで、ユネスコが大キャンペーンをして、何とかこれを保存しなければならないとなる。
- －現地に保存する、チューブみたいなもので水中に行けるようにする現地保存案、上部に移設して守るなど、色んなことが模索される。
- －アスワンハイダムは電源開発が目的。国の開発の為には電力が必要で、エジプトは電力の方が大切だということ。
- －先進国はこういう大事なものを世界的に守る必要があるとユネスコのキャンペーンに呼応する。そこでイギリスやフランスが動く。当時、イギリスとフランスはエジプトとは対立関係にあったが、文化財に関しては専門家が中心になり、協力関係を結びこれを何とか保存するために技術とお金が必要だということ。最終的にこの神殿は1万ピース以上に切り、石を切断し、水没しない所に据え付け直した。
- －救われた全ての遺跡は救えなかったが、主要な遺跡は救われた。その時に世界中でお金を出してユネスコが取りまとめてこういう事が起きた。

5. 世界遺産条約の特色

- －アブシンベル神殿他、ヌビア地方の文化遺産はエジプトにあるがエジプトだけが責任を負うのではなく世界中で守る必要があり、お金を出す必要がある。そこから国を越えた世界的な価値がある世界遺産を守るべきだということが固まってくる。
- －1972年に平時における初めての遺産保護の枠組み。武力紛争時にはあった。
- －世界遺産という名前「World Heritage」を付けた。それまでこうした国際組織が持っている国際条約は「International○○」が多い。そうでなく、世界は一つなので、世界という言葉を使って世界が責任を持つと言ったのが非常にユニーク。
- －仕組みとしては、文化遺産と自然遺産を一つの条約で守っているということ。どの国においても文化遺産と自然遺産は仕組みが違う。日本でも文化庁と環境庁で役所が違う。ほとんどの国がそう。世界遺産条約だけがユニークなことに一緒にやっている。これは、二つの違う運動がここで合流したから。
- －考え方がかなり違うのでそれを一体化するのは難しい。同じ文化遺産でも国を越えて守らなければならないので、遺産にどういう価値があるのか、価値の見分け方が難しい。日本国内の文化遺産だとこれは奈良時代、平安時代、江戸時代と言えば、その文化財がどれくらい貴重なものか、遡れば数が少なくなるので見当がつく。歴史を共有しているので皆分かるが、世界は一律に見るとそんなことは言えない。国によって歴史も違うので、基準を決めるのはとても難しい。なおかつ、世界で共通するような基準が決まっているが、審査に手を上げるのはそれぞれの国。日本は日本から推薦

- する。一番古いのは国の数だけあるわけなので、日本で一番古いとかいうのは理由にならない。日本から推薦するが日本の論理を越えた理屈を建てないといけないのは結構難しい。
- －バッファーゾーンという緩衝地帯。もともと自然遺産を考える時は緩衝地帯が必要になってくるが、文化遺産にもこれを適用することになっている。これも文化遺産と自然遺産を一緒にやっているユニークな所。
 - －価値を表す言い方が条約の中に出てくる言葉で「顕著な普遍的価値」=Outstanding Universal Value。OUVがあるかどうかで世界遺産になるかどうかが決まる。どういう形で顕著で普遍的価値を海外の人に分かるように言い表すのが難しい。
 - －危機に瀕した世界遺産リスト。出発点からしてここが一番最初、ヌビア地方のアブシンベル神殿みたいなもの。ここをどんな形で守るかが出発点。ところが今もあるが、日本にないということもあって、あまり報道されない。守られていないということだから、国にとっては名誉なことではない。自分の国にあるリストが危機リストに載るのを嫌がる。
 - －世界遺産になったら終わりということではなく、6年ごとにどういう風な状況に今なっているかをユネスコに報告しなければならない。もうすぐアジア太平洋、富士山ももう一度やらなければならない。義務付けられている。保存状況の報告書が求められている。
 - －例えば、モスター＝橋(現地語)。ボスニア・ヘルツェゴビナ、旧ユーゴスラビアにあるこの橋の両側にギリシャ正教徒とムスリム回教徒が住んでいて、例の1990年東西の壁、ベルリンの壁が崩壊したところに内戦状態に陥る。この橋そのものは回教徒が造った橋。モスクを作るような非常に優秀なアーチを作る技術を持っていて、それが誇りだったので、ギリシャ正教徒が打ち負かすということで砲撃されてしまい、この橋は破壊されてなくなってしまう。なくなった後にこれを何とかしないといけないという運動がおこり、再建された。再建された後にここが世界遺産になる。ある意味それぞれの宗教が違う人々が最終的に融和した絆として世界遺産として認められる。
 - －紛争時、文化遺産はそんな意味でターゲットになりやすい。写真はバーミヤンの大仏。これも1990年に破壊されてしまう。破壊された後に、危機遺産と同時に2003年に世界遺産になる。このような事は今でも起こっている。写真はシリアのアレッポ。世界遺産になっているが、未だに内戦状態。本来はこういうものから遺産を守ることが重要な事だったが、徐々に世界遺産のターゲットも変わってきている。

6. 文化遺産の「顕著な普遍的価値」6つの条件

- －この6つの基準の中でどういう風を選ぶかが問題になる。
- －富士山はiii、iv、viが適用されている。
- －例えば、(i)人間の創造的才能を示す傑作とは。タージマハル。これは、(i)ということだけでなっている。
- －これは原爆ドーム。(vi)ものごととの関連。原爆が落ちたということが原爆ドームをこういう形にした。被災直後は全く文化財でもなんでもなかったが、日本の中でこれが文化財に指定された後、世界遺産になる。
- －アウシュビッツ強制収容所も(vi)ものごととの関連だけでなっている。負の遺産と言われている。世界遺産の中で負の遺産という正式な用語はないが、悲劇的な出来事との関連の中にあるから世界遺産になった。
- －南アフリカのロベン島も(vi)ものごととの関連だけでなっている。ネルソンマンデラが27年間幽閉されたが、この島に刑務所があったということでこの島が世界遺産になっている。人種差別の

歴史とそれを克服してきた歴史の象徴であるといことで世界遺産になっている。

ーワルシャワの中心部は第二次世界大戦で破壊されるが、ここから再建されたこと自体が再生の努力だということで世界遺産になる。絵葉書がたくさんある。

7. 世界遺産のもうひとつのチェックポイント

ー①本物かどうか。真実性＝オーセンティシティ。②完全性、全体性＝インテグリティ。両方とも日本語になりにくい。日本にあまりそういう概念がないということ。特に文化遺産が非常に難しい問題であるということ。

ーインテグリティに関しては富士山でも議論になった。どこまでひろげると富士山といえるのか、どこまで狭めても富士山と言えるのか。という問題。

ーオーセンティシティに関しては、タージマハル。見ると全く何の問題もなさそうに見えるが、手前側の庭園の部分は、昔は薬草園だった。しかし、今はこう(写真)。イギリスがヨーロッパ型の庭園としてここを整備したから。タージマハルの庭園は、色々な歴史を経てこういう景色になっている。インドがイギリスの植民地になったという歴史も表している。それも歴史の一部であるし、これが我々が持っているイメージとして定着してきているので、それも含めてこれを評価すべきではないかということで、本物というのは、手前の風景もそういうものとして評価されているということ。

8. 世界遺産の問題点

ーアレップなど武力紛争時の場合、やはり無力。世界遺産だから守るといっても守ってくれない。

ー文化遺産と自然遺産の数が不均衡。文化遺産の方が増えてくる。なぜかという、自然遺産の場合、世界中同じ条件で審査が入る。世界最大のブナ林(白神山地)として世界遺産になると、世界で一つしかないのが当然。世界で比べることができる、もしくは気候帯ごとに比べることができるので、科学的に審査ができる。文化遺産の場合は、文化の背景が違っていると、同じように教会を比べることができない。お寺でも中国と日本のお寺では文化的な背景が違う。一つ最古のお寺があればいいというわけではない。ということで、文化遺産の方が数が増えることになる。

ー地域的に不均衡。欧米に多い、半分くらいある。欧米の文化遺産の定義を作る時に参考にされている。欧米の文化が評価されやすい仕組みの中にある。石の文化やレンガの文化。木の文化や土の文化は最初から定義の中に入っていないので、評価しにくい。

ー文化遺産の数が増えるということ。文化遺産は人が造るので、その技術は無形の文化遺産。しかし世界遺産は有形の、かつ土地に結びついたものしか世界遺産にならない。宝物みたいな文化財は世界遺産にはならない。

ー都市周辺では開発が起きるので、そことの関係をどうするかという問題がある。

ー世界遺産は国にとっては、国家のメンツをかけているという部分もあるので、「政治化」しやすいという面もある。

ーいくつか例を紹介する。アメリカのフィラデルフィアにあるインディペンデンス・ホール。ヨーロッパであればどこにでもありそうだが、建物の価値というよりも、ここでアメリカの独立宣言が起草されたということで、近代の民主主義が発したところでもあるということで価値があるので世界遺産になっている。小さい建物で、非常に古い時代に世界遺産になっているので、バッファージーンも小さい。そうすると、後ろに色々なものが建つ。今現在の形(写真)。裏側のワンブロックがバッファージーン、手前側の3ブロックがバッファージーンになるが、それを越えて建つのをなかなか止められない。こういう問題が起きる。また、日本の中では伊勢神宮。伊勢神宮は日本の文化の中では最も代表的なものの1つだが、なかなか世界遺産にはなれない。伊勢神宮の方も世界遺産

にならなくても、その前から自分たちはあるんだということがある。世界遺産の方から見てもこれは20年ごとに建て替える。物が重要、物の濃さに歴史の価値が埋まっているというのが石の文化のベースとしてある。木造の文化の粋というのは、同じものを次の世代も建てられる、こういう技術が受け継がれてくるのが建物と同じくらい、もしくは建物以上に重要だということがあるので、こういう事が起きる。そういうことがある意味 石やレンガとは違う文化のあり方なので、そこをうまく説明することが必要になってくる。こういう事も難しさの一部。

9. 世界文化遺産の新傾向

- 世界文化遺産の最近の傾向(ここ20年位)。新しいものを世界遺産として取り入れようということが起きてくる。新しいものとして、どういふことがあるか。1. 文化的景観 2. 産業遺産 3. 文化の道 4. 聖なる山 5. 20世紀建築。今まであまり評価されてなかったものを取り上げようという大きな流れがある。日本が最近いろんな形で提案しているものも大体この流れに乗っている。一個のものだけでなく、複数の資産で、シリアル・ノミネーションも増えてきた。富士山もそう。1個だけで誰も文句を言わないというのはなかなか数が少なくなってきて、色んなものを組み合わせてある一つの物語を作り、継続性とか一つのユニークな物語を作って、そこに「OUV」があるということを使う。そのために複数のものを取り上げるということが大きな傾向になってきている。
- 具体的に物で見ると、最初に文化的景観として世界遺産になったフィリピンのコルディレラの棚田。この棚田は、ある意味それまでの文化遺産の考え方とははっきり違ってくる。なぜかという、それまでの文化遺産は非常に貴重な遺産なので、手を加えない、そっと守っておく。タージマハルもそう。手を加えると壊してしまうということがあるので、なるべく手を加えないで守るということが一般的だったが、これは逆で毎年田んぼを作り続けないと守れない。手を加えないで放っておくと一年、二年でボウボウになってしまい、耕作放棄地だと価値がない。ずっと耕作を伝統的なやり方でやり続けることが大事。この集落にちゃんと人がいて、田んぼを耕してくれて、あまり大きな機械を使わないでやり続けることがこれを守るといふことに繋がるわけなので、それまでの文化遺産とはかなり発想が違っている。
- 近代建築で言うと、この写真はスウェーデンのスクーグシュルコゴーデンという墓地と火葬場。これは1930年代にできたモダニズム建築。他に、ノルウェーの北極圏にある小さな集落。人が住むのに非常に厳しい環境のところずっと継続しているそのものに価値がある。文化財的な一目見てこれはすごいというものでなく、ずっと継続している。この写真は、中世市場都市プロヴァン。ここで交易の市が開かれるということがずっと継続している。

10. 世界遺産に向けての富士山の論理

- 富士山を議論する時に、「信仰の山」ということと同時に「芸術の源泉」ということを取り上げた。日本人から見ると富士山が信仰の山ということは自然に感じるが、他の国の申請書を議論していて驚いたことがある。この写真はイタリアから当時出ていたもので、2003年に世界遺産になったピエモンテ州とロンバルディア州のモンティ・サクリ。モンティ・サクリは英語に直すと Sacred Mountains なので、聖なる山そのもの。私はこれをイコモスの本部で担当して議論をしていたが、どこが聖なる山かと思う。ここにあるのは、キリスト教の一派が色んな信仰の施設を作り、信徒はここをずっとある種巡礼みたいな形で建物を巡回する。その建物の中にこういう彫刻があり、こういうものを見て回るにより、キリスト教の教えが分かるというところ。山とはあまり関係ない。中世ヨーロッパなので、文字も読めない人も多いので、こういうことが書いてあるとよく分かる。そういう所をモンティ・サクリと呼んでいた。山とは直接関係なかった。私は、山が聖なるところ

で麓にこういう所があって山と関係していると思ったが、山とは全然関係ない。これはそういう意味で我々が考える聖なる山とは違うので、単純に聖なる山と言ってしまうと、誤解が生じるので聖なる山のイタリア語「モンティ・サクリ」をそのまま使うべきだ。これは複数形なので聖なる山々という感じの意味。複数形そのまま使い世界遺産のタイトルとなっている。つまり同じ聖なる山と言ってもイタリアのこの宗派が考える聖なる山と、日本人、富士山を中心となって考える聖なる山と全然違う。日本で考えて当たり前だと思っていることが、うまく伝えないと海外には伝わらないということが起きた。

- この写真は、「絹本著色富士曼荼羅図」。富士山本宮浅間神社にある曼荼羅図。こういう風に富士山を見る、ある種これが日本人の宗教観、富士山が聖なるものだということを表す表し方。全くモンティ・サクリと違う。富士山だけが聖なるわけではなく、一番手前に三保の松原が描いてある。この絵が三保の松原を外すべきではないという時に非常に大きな役割を果たした。つまりここまでが富士山で、信仰でいう曼荼羅の中に三保の松原がちゃんと描かれている。ここで禊をして浅間神社から登り始める。この道行き全体が信仰の行為なのでそれを表しているということ。距離として40 km以上離れているが、ここは違うということではない。信仰の中では一つの絵柄の中に一体になっているということを言った。この曼荼羅図も世界遺産の推薦書の中にあつたので、曼荼羅図そのものは美術工芸品なので世界遺産にならないが、世界遺産を説明する非常に重要な手掛かりになる。三保も納得してもらった。そういう絵がいくつもあり、北口、吉田口の登っている所。祈ることと、祈る本体としての富士山、遥拝、登拝、巡拝という風に信仰の形も変わってくるし、信仰のあり方も修験道など、様々な形で変わってくる。それが一体となって残っている。
- もう一つは、こういう形で、ヨーロッパにもジャポニズムということで影響を与えた。ゴッホの絵。この中に富士山が描かれている。浮世絵の大きな影響、つまり日本の国内だけでなく世界中の芸術の流れに影響を与えた。

11. 富士山の議論

- この図は25の資産全体。これを見て分かるように富士山と言っても、この濃い赤の所がコア。ベージュがバッファゾーン。バッファゾーンからは演習場は除外されている。これを見て、色々な所に点在しているのではないか。特に山の麓にある点在しているところと富士山との関係はどのような関係があるのか問われる。申請書を書く段階からも議論した。
- どこまでが富士山なのか、山頂だけでいいのか、五合目までなのか、麓までなのか、海から立ち上がっているところが大事なのか。難しい議論。溶岩の流れ出したところまでなのか、流れて止まったところが、そこで止まったということが浅間神社をそこに建てる根拠になったとすれば、そこまではないか。浅間神社がつながる所までではないかなど。しかし、広げるとそこまで本当に守れるのかという問題が起こる。
- 麓にある浅間神社が点在しているが、点在している構成要素を山と言っておきながら点在しているのはどういうことなのか。信仰上は結び付いているが距離的には離れているのは、日本の信仰のあり方としてある。平泉もそう。神社で祈る時にご神体としての山との関係はつながっているが、ずっと物理的につながっているわけではない。しかし離れていても別々で途切れていてもいいのかというと、そんなことはない。昔から「巡拝」と言われているのであれば、「巡拝」がどういう風にある、今も今後も巡拝を説明していくのかということの研究を続けなければいけないと言われた。点在するものをどういう風にして結ぶ論理があるのかを今でも研究を続けている。守る時のストーリーも続けて考えていかなければならない。

—もう一つ大きく言われたのは文化的景観ではないか、ということ。世界で文化的景観は 1990 年代に議論になる。文化的景観というのは、色々あり、コルディレラの棚田の場合は、農業的な営みが作り出している景観。そういう農林業が生み出す文化的景観もある。田んぼができたり、棚田ができたり、防風林ができたりする景色。それだけでなく、文化的景観の中にはそれが持っているイメージを象徴するようなものとしての文化的景観があると言われている。物事との連関＝アソシエイティブ バリュー、何らかのものを連想させるものという文化的景観があると言われている。その典型例として富士山は世界で知られている。富士山を見れば日本だと分かる、日本の文化の象徴でもある。ある一つの誰かが考える連想がある。そういうものを連想させるような、ある風景がある一つのものを連想させるというのは、文化の在りよう。そういうものにまで成長していったものとして富士山があるとすれば、これは文化的景観として守るべきではないかと言われた。イコモスが作っている文化的景観の世界の中の典型例の中に富士山が入っている。それも連想的景観として入っている。イコモスとしては、これは文化的景観として守るべきではないかと言われた。日本側は文化的景観という風に言うと、三保の松原から見た富士山はまさに文化的景観だが、そこを守るということは麓から全部守ることになるのか。となると、富士山の麓には工場など様々なものがあるので、これを全部コントロールするのは物理的に不可能。日本側としては、文化的景観という非常に広い所までカバーしてしまうため、難しくなってしまうので、そこは避けたいということだった。日本は文化的景観を出さなかったが、イコモスは文化的景観の代表例なので、守る時には文化的景観としての守り方をしてくれと言ってきた。

—いろんな問題が指摘されている。景観阻害要素が静岡県側も山梨県側もたくさんある。

—たくさんの方が入り込んでいる。山に登っているのは、今年、去年はコロナでほぼゼロだが、それまでは山梨県側だけで 30 万人位、五合目までだと 500 万人～600 万人位登っている。すごい数が登っている。4000m 近い山で、登る時期が限られていてそこに 30 万人登っている山は世界にない。過大ではないかと言われた。ちゃんとコントロールすべきではないか。

—周辺環境、麓の環境をどういう風にコントロールできるのか？

—様々な要求が突き付けられた。たくさん要求があり、本来ならその要求があるので登録は延期すべきだと言われてもおかしくない位の要求だった。なぜ言われなかったのかと思うと、恐らくは富士山のことをみんな知っているのだから、価値があることは分かっている。課題もあるが、課題はちゃんとクリアしてほしい、クリアするという期待も含めて登録を延期しなかったのではないかと考えている。

—途中の段階で、自然遺産でもあるのではないかという議論もあった。富士山は 20 年以上前に自然遺産として富士山を登録すべきだという動きが起き、途中まで動いた。しかし、当時、環境問題が厳しかったので、環境庁そのものが積極的ではなかった。ということで、自然遺産としての動きは止まって、逆にそこから文化遺産としての動きが始まった。富士山は美しいから信仰の対象になったので、当然自然美がある。「たぐいまれな自然美」というのが自然遺産の価値基準にあるので、これも使うべきではないかという意見もあった。そうすると自然遺産でもあり、文化遺産でもあるという日本初の複合遺産になるというので、議論があった。ところが、かつて自然遺産を議論した時に環境上問題があると言っていたので、そこをやると問題点を色々な形で指摘されるのではないかということで、今回は自然美ということもあるが文化遺産の側だけでやろうということで、自然遺産には手を挙げなかった。

—この図は、途中段階でできた世界遺産として色をつけるべきではないかという図。今とは形が変わ

っている。何ヶ所かこの後で外れる所もあれば、加わってくる所もある。次の図は、最終的なもの。北西側にかなり太く伸びたのは、そこからの眺望というものが一つの重要な眺望なので、それを守るためには麓も守らなければならない。麓を全部守るのは無理だが、本栖湖側からの眺望を守るという意味ではそちら側の麓はきちんと守ったということと言えるようにしよう。眺望点はそこと三保と2ヶ所。そういう議論の中でこういう形に落ち着いたということがある。

- －写真の本栖湖側の景色を守るということ。この景色がなぜ大事か。これは千円札に使われている景色。お札にも使われるくらいの景色は富士山の代表的な景色。この麓を守るために北西側の麓の方もコアに入れたということ。
- －もう一つ(写真)は、こちら側は全部守るのではなく、富士山と三保の両方がセットになっていることが大事だということ。まさにこの曼陀羅図。
- －この写真は北側。山小屋があったり、五合目の混雑があったり、景観上も非常に悪い。ここを何とかすべきだということが問題になった。どういう風に改善すべきかずっと議論している。また南側に関しては、三保の駐車場はこれでいいのか、海岸の砂が減らないように、どういう風を守るか、テトラポットが見えるのでどういう風にするか、撤去するのかなど、今計画は立っている。北側の馬返しの所も様々な議論がなされた。

12. 富士山への注文

- －25の構成資産のバラバラの集合体ではなく、一つの存在として守ってほしい。
- －一つのつながりとして、つながっているための巡拝道、参詣道を考えないといけない。
- －文化的景観としての管理をしないとイケない。
- －6つの勧告。1：全体構想の策定 2：裾野における巡礼路の特定 3：来訪者管理 4：登山道等の保全対策 5：OUVを伝えるための情報管理戦略 6：経過観察指標の拡充・強化。
- －1と3が難しい。構想を「富士山ヴィジョン」という形で作り、提出した。非常に厚い100ページを超える報告書を作り、高い評価を得た。他の国でもモデルにすべきだという声があった。
- －ヴィジョンの中に、登拝・遥拝・巡拝がどのように変遷してきて、今とどういう関係があるのかを書かれ、この中で環境改善をやっていく。
- －白糸の滝(写真)左から右へ改善された。少しずつ改善されていることを報告した。入口の所にあつたお店も撤去されたり、集合化され、移っている。
- －富士宮の方の広場もきれいになった。着実に色んな作業が進んでいる。

13. 富士山ヴィジョンを受けて

- －2016年には提起された富士山ヴィジョンをみて、「この方法は資産管理が保全に対処し得るのみならず、文化的アイデンティティ及び社会的責任の強化を通じて、いかに付加価値を創出しえるのかについての優れた模範である」、つまり他の国もこういうものをやるべきだということを書いてくれた。次々に報告をやらなければならない。

14. 登山者の適切な管理を例に

- －適切な管理をどうするかということ。
- －2015年から3年間、日本の国立公園では例がないほど非常に細かい時間・場所ごとの詳細な混雑状況を24時間体制で取り、どこに混雑が発生するかが全部分かるようになった。基本的にピークの時に、特に北側から登る人たちに渋滞が発生している場所が9合目から山頂にかけてある。そういう所を抑えるということと、分散するということが、ここに行くで一時間以上の渋滞が発生しているということが皆が分かる情報共有の仕組みが必要である。

ー山に登るだけでなく麓をゆっくりといろいろな形で回るということも登山のあり方として重要ではないか。

ー今それを実行に移す段階である。

15. 遺産影響評価マニュアル（HIA）の作成

ー色んなものが動くとき、物が作られる時に周辺の環境に影響がある。遺産影響評価マニュアル（HIA：Heritage Impact Assessment）を作る。今最終段階で、今年の3月にマニュアルができて4月から運用が開始される。マニュアル案が公開されている。

ーどういうものを、どういう形で手続きをやるのか、誰が評価するのか、どういう形で専門家が関わるのか、どういう形でユネスコが関わるのかがすごく問題になっている。

ー例えば、須走五合目のインフォメーションセンターを作る計画がされているが、ここに関してモデル的にやった。学術委員会の中に小委員会を作った。このような形で古御嶽神社の所を作る。具体的にどういう場所で、平屋の木造の建物を作るということ。今年度に計画し、来年度に作るということになっている。こういう場所で、環境としてどういうものを価値として認めないといけないのか、どういう影響がありそうだとと言えるのかが書いてある。具体的に、今は資料の左上のような形になっているものを、少し今あるものを改善し、増築し、インフォメーションセンターを作り、入口にある案内所を壊してそこにバスが転回できるスペースを作るという、資料の左下のような計画。但し、ここにバスが停まるとバスが最初に見えてしまうので、そのデザインを変えてほしいということがあった。こういう細かいやり取りをし、具体的に計画を作る。ここに関しては、一応インパクトアセスメントが終わり、次のステップに移ることになっている。

ー次に大きなものは、北側の登山鉄道。遺産影響評価をやるということが、2月に決まった登山鉄道の構想の中にも謳われていて、もし登山鉄道が計画化するとなるとこれをやるということになっている。

ーこういう事が、富士山が単に世界遺産になって終わりということではなく、ずっとその後世界遺産委員会で言われてきた宿題をやり続けていることを紹介した。

16. 質疑応答

ーQ. 須走浅間神社もそうだが、日本の木造で作られているものを修復する時に今のアセスメントをかけた上で修復作業を進めていくようになっていくのか？

A. なんでもかんでもチェックするというわけではなく、世界遺産に関する遺産影響評価は、世界遺産の顕著な普遍的な価値に影響を及ぼす恐れがあるものはやることになっている。浅間神社の修復や建て替えは、そのこと自体が富士山のOUVにマイナスな影響評価を及ぼすことは考えられない。むしろ信仰というものを活性化することに繋がるので、事前にこれが本当に顕著な普遍的な価値に影響するかをまず議論し、建て替えや修復は問題ないということになればそこで終わる。例えば、レストランなどもっと違うものを作るということになると、レストランが富士山と一緒に見えるようなところがあるので、そういうものができるのは顕著な普遍的な価値に抵触するのではないかと判断されれば細かい手続きをしなければならない。世界遺産になっているところで、色んな開発行為が周りに起こると反対の人たちがユネスコに対して陳情する。最近メールですぐに送れるので、こんな大変なことが起きているということがすぐに分かる。すると世界遺産センター側から文化庁に何が起きているのか報告しろ、ということになる。本当に起きている場合は、遺産に影響ないかちゃんとアセスメントしろと言われる。世界遺産センターでも大きな開発が行われると必ずこれを言われるので、国内のものはあらかじめマニュアルを作り、それ

でやるということになった。

一Q. 例えば、須走口には山室が何軒もあるところだが、山室の修復や修繕、久須志神社が崩壊をしていて、それを再建しようという話も以前からあるが、そういった時にもアセスメントにかけるのか？日本の国内の法令状で難易度が高いと言われているが、それにプラス登山道自体が赤いゾーンになっているということで、逆にこのアセスメントを使うことによって影響的にも少ないので妥当だろうという風に使える、そういうガイドラインにもなりえると思ったが…。

A. 基本的には日本の名勝にかかっていたりするので、そこの許可基準で十分なので、それ以上のことをやるのは普通はないが、名勝にしても国立公園にしても許可する基準が世界遺産の基準とは必ずしも一致していないので、もしそれが許可されたとしても本当にそれが世界遺産からみて大丈夫なのかという意味でチェックをする。かなり大きな開発に限られている。日常的な維持管理などはここには絡まない。登山鉄道は計画の段階でまずやらないといけない。もしOKが出たとしても、デザインしたものに対してもう一度やらないといけないとなっている。

一Q. 世界遺産の範疇ではないが、登山道のこと。五合目から上が世界遺産になる。ただし、浅間神社が須走口の登山道の入口で、そこから始まっていて、浅間神社から五合目までは世界遺産の登録の中には入っていないが、もともとの登山道があった。2年前に大きな雪代があり、登山道が2～3m位削れてしまい、土が動いた。歩けなくなったが、環境庁の方はそれを修復しなければ認めしてくれない。今までの須走の歴史からすると、雪代が定期的に起こるので、起こった後歩ける所を新しい登山道にしていった。削れたところを埋めるということは歴史上にしたことがなく、修復すると膨大なお金がかかるのでできない。今は放っておいて歩けない状態。普通にうまくできないか。

A. 議論しないといけないところ。世界遺産の中でも熊野古道も同じような問題を抱えている。台風で地滑りがあり、道が流されているところがあるが、復元が難しいので道を変えないといけない。変えた時に価値としてどうかという議論が現実にある。その時に、物としての道が大事なのか、機能としてつながることが大事なのかということを中心に整理をして、機能がつながっていることが大事だということに整理が付けば、道は他に変わってもいいのではないかということになる。その時に文化財としてみた時にどうなのかは別の話し。文化財としてみると、地番でなっているので、地番が変わると文化財としては認められないと言われたりすることがある。そこら辺の整理をやり、何が一番大事なのか、私は登拝という行為が続けられることが最も基本的な事なので、機能が継続していることが優先されるべきだと思う。皆が納得して機能が継続するということが済むのなら、その時に次のステップに進む。ワンステップごとに合意していかないとうまく進まない。文化庁が考える考え方と環境庁が考える考え方と違うし、世界遺産の考える考え方ともまた違う。

一Q. ツーリズム推進法がある中で、ヘリテージツーリズム推進法ができないのはなぜなのか。これだけ色々文化遺産や世界遺産がある日本の中で、そういう法律ができた方が色々な人が巡る、廻る、保存することが進むのに、なぜできないのか？

A. ツーリズム推進法はだいぶ前にできた。あまり知られていないが、去年、文化観光推進法ができた。文化庁が所轄して、まさにカルチュアールツーリズムを推進する法律だが、まだその法律のもとに計画を作って認定された所が一ヶ所しかないので、あまり定着していない。エコツーリズム、博物館を拠点に色々なまわりにある環境そのものの中にネットワークをして守っていくということなので、どこもうまくそれに当てはまるかという、なかなか当てはまりにくい。文化的な

エコツーリズムと言われているが、博物館を拠点にし、サテライトを置いてそれを巡っていくような形の文化観光はこれに対応できる。まだそこしかないという感じ。今まで文化観光みたいなものを文化庁が進めるといような動きがなかったので、少し前進した。

ーQ. 来訪者管理ということの中に登山のあり方もこれから考えていかないといけないというお話があった。登山道が何ヶ所もあり、今は山梨から登る北口の登山道が過多になっている状態。須走、御殿場、富士宮がだんだん増えていかなければいけない。その中で、市町村、県がそれぞれ考えていると思うが、自治体をまたいでいる部分もあるので、国がもっと大きな枠組みの所が全体的に富士山を捉えて方向づけを考えているところがあるものか？

A. 全体としては、国がやるというより、いかに山梨県と静岡県が調整してやるかと投げられている感じだと思う。山梨県側と静岡県側はかなり状況が違うので、同じテーブルに乗りにくいところがある。観光客、国立公園の利用の仕方もかなり違うし、森林の所有、公有林と私有林の割合も違うので、必ずしも同じようなニーズがそれぞれにあるわけではないことが難しくしている。富士山の問題に関しては両方一緒にやらないといけないので、今までならそれぞれが努力していれば足せば富士山が守られていることになるという感覚だったのが、調整をしながらやるということに関して色々なチャンネルができて、前に比べて風通しが良くなってきている感じがする。県がやるしかないのも、特に来訪者管理は非常に細かいデータが出たので、これをいかにうまく使っていくかということ。今議論しているのは、あまり条件を決めたりすると逆の問題を起こしかねないので、まずはピークを分散するために何ができるかということ。例えば日光の尾瀬はピークにすごく混雑する。その時に、すごく有効だということも機能していることは、今どうなっているかのリアルタイムのカメラの情報がいろいろな所で見ることができるようになっている。そうすると混んでいると、わざわざ混んでいる時に行くより別の時に行こうと、自主的に避けてくれる。そのためにいい情報をきちんと与えること、知ってもらうことが大事ではないか。週末に混むことが分かっているが、こんなに混んでいるということがリアルタイムに分かるとやっぱりやめようとなる。いかに情報をうまく流していくか。ある数を越えると混むことが分かっている。予測もつくのでこの日は超えそうだということをお知らせしておくとか。あまり物理的にどこかで止めるとか以前に、やれる事がたくさんありそうなので、他の所の例も引きながらやっっていこうということがメインの議論になっている。

ー菅沼会長より：山梨県側と静岡県側の富士山に対する観光業の違いが予算の面でもすぐに分かる位の状況になっている。コロナ対策として今年どのような形で富士登山者、来訪者を迎えるかという問題についても山梨県側は各山小屋に 1000 万を超えるような補助金が用意されていると聞いている。それでコロナ対策として個室化を進めたり、そのような形が各山小屋個々で計画をされていると聞いている。静岡県側は全くそのような話が出てこない。やはりお客様を迎える面でも観光業という面では大きな開きがあるという状況。このままでいくと北口、山梨県側にますます人が集中すると静岡県の山小屋としては危惧している。